

民国期における全国規模の美術展覧会

——近百年來中国絵画史研究——

鶴田武良

はじめに

- 一、全国児童芸術展覧会
- 二、第一次全国教育展覧会
- 三、教育部第一次全国美術展覧会
- 四、全国児童絵画展覧会
- 五、教育部第二次全国美術展覧会
- 六、教育部第三次全国美術展覧会
- 七、教育部第四次全国美術展覧会
- 資料1、第一次全国教育展覧会国画部出品目録
- 資料2、教育部第三次全国美術展覧会現代作品目録

はじめに

近百年來中国絵画史を研究するに当って最大の障害は、資料とすべき図書、雑誌が散在していることである。一九三七年七月に始まった日中戦争とそれに続く解放戦争の中で、中国の主要な美術学校は奥地への移転を、時には移転につぐ移転を余儀なくされ、あるいは廃合を繰り返してきた。その間に、散逸し遺棄された資料は少なくないであろう。一つの戦争を漸く生き延び、解放によって安寧の場所を得たものの、先の十年に渡った文化大革命の

動乱で再び大きな災禍に遭い、ついに滅びてしまったものも相当数に上ると考えられる。展覧会目録や美術団体会員録のように、二十年後三十年後には重要な資料となるが、もともと刊行数も少く、小冊子で、用が終ると捨てられる運命であったもの、また卒業記念アルバムのように、数十部か高々二三百部しか発行されず、当人が死亡すれば不用となるものなどに、とりわけ散逸が甚だしい。

広大な中国のこと、それら二重三重の災難を潜って生き残っている資料もあるにちがいないが、その所在を突き止めることは彼の国の図書館事情を以ってしては、少くとも我々外国人には至難のことであろう。筆者は、断続はあるがここ数十年に及ぶ近百年來中国画人資料の搜集の過程で、美術展覧会、美術教育、美術団体、西洋画受容など、近代中国における美術運動の展開の跡をある程度辿り、明らかにすることのできる資料を得ることができた。その中には、多くはないが、入手の極めて困難な資料もある。発見が僥倖としかいいようのない場合もあった。そのような資料の公開を兼ねて、中国の近代（一八四〇—一九一八）及び現代（一九一九年以後）美術に於けるいくつかの問題を、これから数回に分けて述べて行きたい。なお、美術学校の

廃合、美術展覧会及び美術団体などに関わる細かな事項は、追って発表を予定している別稿「近百年來中国美術年表」に入れた。

近代以降において、ある国もしくはある地域における美術活動の特色、あるいは隆替をもっとも良く反映しているものは美術展覧会であろう。本稿では、民国期（一九一二年—一九四九）中国において全国規模で行われた美術展覧会について紹介したい。

先ず、清末—民国初期の美術展覧会を年表にして掲げよう。

一九〇九年（宣統元年）

1月 蘇州教育會勸學所、各學堂成績展覧會（図画、課卷、手工）を開催する。

参加五十校（教育雜誌一一二）

6・3 江蘇教育總會、上海で全省學堂成績展覧會を開く。九日閉會。参加二四五校、作品五千一百余件（教育雜誌一一七）

五校、作品五千一百余件（教育雜誌一一七）

7月 上海城東女學社暑期休暇芸術會（教育雜誌一一六）

一九一〇年（宣統二年）

5・5 清國農商務部、南京で南洋勸業會を開く。美術館を置き、中国画、書などを陳列する。十月二十八日閉會（学林三）

を陳列する。十月二十八日閉會（学林三）

11・15 丹陽城内高等小學校、遊藝會を開く、展示品に鉛筆画あり（教育雜誌二一）

一）

一九一三年（中華民國二年）

2月 上海美術院師生作品展覧會を開く（上海美專二十屆卒業紀念刊）

3・21 江蘇教育會、江蘇全省兒童芸術展覧會を南京韜園で開く。二十三日閉會。

針黹部、玩具部、字部、文章部、手工部、絵画部を設ける（教育雜誌五一）

一）

7月 上海図画美術院第二次展覧會（油画・水彩画）（上海美專第十屆卒業紀念）

この年 濟南で山東博覧會を開く（俞劍華美術論文選）

一九一四年（中華民國三年）

4・21 教育部、中華第一次兒童芸術展覧會を北京で開く。二十二部に分ち、中に字画、手工、編織、針黹の各部あり。五月二十日閉會（教育雜誌六一）

三）

4月 京師中小學校成績展覧會を北京で開く（教育雜誌六一—三）

6・1 サンフランシスコ万国博覧會預展として江蘇出品協會博覧會を上海で開く（教育雜誌六一—三）

この年 故宮に北平古物陳列所を開く

一九一五年（中華民國四年）

6月 上海県教育會、小学成績展覧會を開く。中に図画、手工あり（中国近代教育大事記）

育大事記）

6月 南京午朝門に古物陳列所を設ける

7月 上海図画美術院成績展覧會に人体習作（裸婦）が展示され、問題となる（上海美專二十屆卒業紀念刊）

一九一八年（中華民國七年）

4・30 上海虹口日本人俱樂部で大野隆徳油画展を開く（美術二）

7・6 上海図画美術學校第一屆成績展始まる。十九日閉會（美術二）

12・5 英国マックロード夫人、上海フランス總會で美術博覧會を開く。風景画、人体写生、肖像など千余点（美術二）

一九一九年（中華民國八年）

1・1 神州女學校成績展覧會を上海青年會で開く。西洋画、刺繡画など数百件（美術二）

（美術二）

1・1 顔文樑、葛賚恩、潘振霄、徐泳清、金天翮、楊左陶ら蘇州美術賽會を開く。二十日に閉會。以後、毎年一回開催し、約二十年間続く（美術二）

1・5 民生女學校美術展覧會を開く。十日閉會（美術二）

1・12 ペスタロッツ書院チエクポリーフ蒙古風俗画展を上海博物院で開く（美術二）

- 美術一)
- 1月 北京大学画法研究会成績展覧会(絵学雑誌一)
- 2・2 北京大学学生遊芸大会開く。古書画及び画法研究会作品を展示す。中に水彩裸体画四点あり(美術二)
- 3月 甘肅省全省小学成績展覧会(中国近七十年來教育記事)
- 春 吉林教育庁、教育成績展覧会を開く(中国近七十年來教育記事)
- 4・10 北京ロシア大使館でラドルレフ油画展を開く。百三十三幅(絵学雑誌一)
- 5・3 上海虹口日本人俱樂部で二宮桂仙個展を開く(美術二)
- 5・16 石井柏亭・ポーランド画家シュレニベチ連合画展を上海中西旅館で開く(美術二)
- 5月 上海で山田馬輔水彩画展を開く(美術二)
- 5月 浙江省立第一師範学校桐陰画会同人第一次作品展を杭州で開く(現代美術家豊子愷)
- 6月 寰球学生会で劉海粟、王濟遠近作展を開く(上海美專二十届卒業紀念刊)
- 12月 天馬会第一屆展覧会を江蘇省教育会で開く(芸術十三)
- 一九二〇年(中華民國九年)
- 4月 北京大学画法研究会主催図画展覧会(絵学雑誌一)
- 7・20 江蘇省第二次学校成績展覧会。参加七九校、三十一日終る(江蘇省年鑑)
- 7月 上海美術学校第一次成績展覧会(上海美專二十届卒業紀念刊)
- 10・4 華北賑災協會主催第二次書画展覧会、北京中央公園で始まる。六日閉会(絵学雑誌二)
- 一九二二年(中華民國十年)
- 6月 晨光美術会第一次展覧会、上海四川路懷恩堂で開かれる(芸術界週刊三)
- 7月 上海美術学校十週年紀念展覧会(同校第十届卒業紀念刊)
- 10・1 赤社第一次西洋画展覧会、広州市立師範学校で始まる(青年芸術一)
- 12・1 広東全省美術展覧会(青年芸術一)
- この年 北京大学画法研究会第一次成績展(美術六三一一)

この短い年表から、近代中国における美術展覧会は教育成績展覧会として始まったこと、中国人画家による展覧会は民国八年(一九一九)一月、當時、蘇州第二女子師範学校図画教員であった顔文樑が葛賚恩、潘振霄、徐泳清、金天翮、楊左陶らと共同で催した「美術賽会」⁽¹⁾を嚆矢とすることが分る。なお附言すると、この蘇州美術賽会は「画術を提唱し、相互に策勵し、ただ瀏覽に資するのみで、評判を加えない」ことを目的とし、陳列の範圍は国画、油色画、水彩画、氣色画、鋼筆画、鉛画、炭画、蜡画、漆画、照相(写真)着色画、刺繍画であった。ここに上った名称は、やがて国画が国画に、油色画が油画に、水彩画が水彩画にと変って定着し統一されていったから、西洋絵画が中国で根付く過程での呼称として興味深い。また蘇州美術賽会はこれ以後毎年一月に開催され、民国二十四年(一九三五)に第十七回を数えたから、現代中国で最も長く続いた展覧会といえよう。

一、全国兒童芸術展覧会

近代中国における展覧会が教育成績展覧会に始まったように、全国規模の展覧会も教育展覧会に始まった。民国三年(一九一四)四月の全国兒童芸術展覧会である。いづれ、別稿「民国初期の美術教育」において詳しく述べるが、清朝は光緒二十八年(一九〇二)七月、張百熙奏進の学堂章程、いわゆる欽定学堂章程によって小学校以上のすべての課程に図画を置くこととし、日本から東京美術学校卒業生を教員として招くとともに、同年、南京に三江師範学堂を開設して手工及び図画教員の養成に取り掛かった。さらに光緒三十一年(一九〇五)には、保定の北洋師範学堂に図工科教員養成の課程を増設した。

清国は、このように学校教育制度の施行当初から、図画、手工を教育課程

に取り入れたが、清末に至ってもほとんどの学校が図画、手工、音楽担当の専任教員を欠くか、他教科との兼任が普通であった。中華民国と改まっても、事情はさして変らなかつたようである。

民国元年（一九二二）五月、教育部は各省に小学課程での手工科を重視するよう通達を出し、八月には湖南省教育司が次学期の教育計画三項を発表したが、その第一に教育養成所は手工、図画、音楽科目を重視すること、が挙げられていたから、全国児童芸術展覧会は、手工、図画教育振興の一環として提唱されたものであろう。

民国元年九月二十八日、教育部は部令第十四号⁽³⁾で各省に宛てて、民国二年夏に全国児童芸術展覧会を開催するから、民国二年三月末迄に作品を送付するよう通達し、合せて八条から成る蒐集条例を公布した。その内容は次の通りであった。

- 一、製作者の年齢は十五歳を限度とする。
- 一、製作者は男女及び学問の有無を問わない。
- 一、製作品の展覧に供すものは次の如くである。
 - 甲 文章、乙 字（書）、丙 絵画、丁 手工、戊 針黹、己 自作玩具。
- 一、製作品には甲姓名、乙年齢、丙籍貫、丁住処、戊家族の職業、己学校あるいは私塾に入学の有無、庚藍本（手本）の有無を記す。
- 一、製作品は応募の種類、数を制限しない。
- 一、製作品は児童の本真を第一とし、おとなが手を加えてはいけない。但し、字を書くことができない者には、代つて姓名を記してやってもよい。
- 一、製作品は精巧を求めない。数歳の児童の作ったもので、成人には極めて拙いと見えるものでも展覧する。

一、数歳の幼児はもとより絵画、針黹を知らないから、おとなが題を与えて好きなようにつくらせてもよい。数筆、数針の品でも展覧する。ただ、作った

民国期における全国規模の美術展覧会

ものが何であるかをはっきり記しておくこと。

民国二年二月七日付で、教育部は各省都督、民政長に宛てて、展覧会の出品期限が三月末であることを重ねて通達し、出品を督促した⁽⁴⁾。三月に入ると、各省から展示作品が到着し始めた。しかし、三月末まで、という通達は守られず、大部分は四月、五月になって届き、奉天から届いたのは七月中旬であった。作品の遅延にさらに他の事由が加わつたらしく、教育部が展覧会開会日を通令したのは民国三年四月十四日のことで、四月二十一日午後一時開会、五月二十日閉会とした⁽⁵⁾。さらに民国三年四月十五日付「教育部令派夏曾佑等為児童芸術品展覧会幹事文」で夏曾佑、陳任中、汪馨、柯興昌、周樹人（魯迅）、錢稻孫ら七十人を展覧会幹事に発令した。

莊俞の「全国児童芸術展覧会記略」⁽⁶⁾によると、会場、陳列などは次のようであった。

会場は、北京の教育部の左、かつての中央教育會議及び民国元年の臨時教育會議の議場とそれに連続する房屋を当て、室内に長卓を置き、その配置によつて逐次參觀できるよう順路とした。

陳列は省別とし、一直隸、二湖北、三江蘇、四浙江、五奉天、六黑龍江、七新疆、八雲南、九貴州、十広東、十一広西、十二河南、十三福建、十四安徽、十五四川、十六湖南、十七江西、十八山西、十九陝西、二十山東、二十一甘肅、二十二神戸（華僑同文学校）の順であった。各省毎に作文、習字、図画、手工に分けて長卓の上に並べ、習字と図画の懸けることができるものは壁面に懸けた。

会期は四月二十一日から一ヶ月間、毎日午後二時から五時⁽⁷⁾までであった。參觀には次のような閲覧規則五条が設けられた。

一、本会の物品は省別にして十一室に陳列した。別図の如く、閲覧者は順序に従って進み、列を越してはいけない。もう一度見ようとする者は再び入口から入り、逆戻りしてはいけない。

一、陳列品は細碎な物が多く、整理が困難で破損し易いため、いっさい手を触れてはいけない。但し本会の許可した者は別である。

一、会場室内では喫煙、手鼻、痰唾、大声で話すこと、他人並びに物品の妨げとなることを禁じる。

一、閲覧者で物品の状況を書き写したい者は写してもよい。もし文章で発表する場合は褒貶を問わず、児童の姓名を挙げてはいけない。写真をうつす時は本会の許可を必要とする。

一、閲覧者で各省出品物に対し批評、意見のある者は本会事務所に投書することができ。その中から択んで報告に載せる。投書の受付は六月末までとし、署名のないもの、仮名のは報告書に載せない。

展覧会を見た莊俞の感想は次のようなものであった。

「直隸の出品が最も多く、手工、凶画ともに優れていた。北京の手工の特色は粉筆細工と麦桿細工であった。麦桿のような手工材料は各省どこにもあるが、他省の出品中にあまり見ないのは、このような手工の教授が北京では行われているが、他省では殆んど行われていないことを示すものであろう。江蘇は竹細工、江西は通草細工、四川は木工、安徽は絲綿織物、広東は麦桿及び籐細工にそれぞれ特色があり、すぐれた作品が多かった。概して紙細工、粘土細工が多かった。絵画では湖南省周南女学校の考案画、随意画、写生画が優れていた。」

閉会后、五月二十五日から六月二十四日まで、出品作品を一篇文章、二字(書)、三画、四手工、五編織、六針黹に分けて審査し、甲、乙、丙等を選び、賞品を与えた。その基準は、甲等は創作の精なるもの、乙等は創作の次

なるもの及び模倣の精なるもの、丙等は模倣の次なるもの、であった。なお、一年齢十五歳以上の者、二説明記載が簡略すぎるもの、三蒐集範囲外のもの(例えば英文、算学など)は審査の対象外とされた。その結果は各部門毎に概評と合せて甲、乙等に入った者の姓名、年齢、籍貫、学校名、品目が『第一次全国児童芸術展覧会紀要』に掲載された。

絵画部門で甲等を得たものは二十一名、乙等は八十六名、種目は毛筆、鉛筆、水彩、毛筆水彩、指画、木炭、色鉛筆などであった。その概評は次のように述べている。

形体が正確で、筆法が穩健、色彩が調和して趣味優長なるものを甲等とし、この四点を少し欠くものを乙等とする。児童の作画は、先ず形体の正確さを第一とし、次に骨法用筆、次に随類賦彩を求める。穩実にして滞らず、活発にして軽率ならざるもの、これが佳品である。また範本(手本)に従っているか否か、教師の学力、教え方の優劣を見ることである。形体が複雑で、筆画の繁雜なもの、例えば重巒疊嶂の山水、幾何法の機器図、極小縮本の地図、あるいは極めて荒率、草々の筆法は賞鑑家には逸品、妙品であるが、児童にとっては手本とならない。ただ外觀をまねると、形体は正確ではなく、筆法は軽率に流れ易い。そのようなものは皆、程度が甚だ高く、児童には適していない。印刷の標本画は極力模写するもので、形似を求める以外、筆法は全く無い。児童が模倣を好むのは天性であるから、優良な手本が無いと悪俗な習慣に染まってしまう。筆にまかせて塗りたくることはもっぱら主観によるもので、いささかも客体の考察がない。範本よりすぐれているのではない。あるいは薄い紙を当てて鈎模することは、心を用いず、ごく器械的な動作である。伝模移写はもとより習画に必要なことであるが、いわばまねごとであり、論評するに値しない。児童の習画は毛筆(水彩を含む)、鉛筆(色鉛筆を含む)の二種で十分である。漆画、炭画、鋼筆画は、徒らに高奇にとめるだけで、実力をつけない。烟酒は衛生に有害で、児童の見るものではない。もし酒具、烟卷の類を画かせるなら、それ

は徳育に宜しくない。また自在画の直線は器械で画くもので、手腕をして正確な習慣を練習させることにはならない。また出品中には実質が全く無いが、徒らに華美な装潢を事とし、あるいは作者の写真を付して、児童の虚栄心を煽るものがあつた。また藍本がありながら、藍本無しと記していた作品もあつた。眞実を旨とすることに悖るものである。設色の濃淡、乾湿は適度を求めることが最も難しい。紙質の厚薄、鬆密と極めて関係がある。よく研究すべきである。署名落款が往々画位を侵しているが、それは我国画家のもっとも忌避するところである。西洋画においても極めて慎重である。(字体の位置、大小、彩色、光線の配合などの)勝手気ままな落筆は、画に重大な災いとなる。以上、数点を記した。いっそうの工夫、改良を加えて、眞実、優美の域に到ることを望む。

手工及び玩具の概評は、某校の出品は児童図画数点であつたがその図は皆器械画で、とうてい児童に出来るものではなく教員が作ったと考えられること、某地の出品はすべて日本の材料を用い、日本の方法に倣い、日本の名称をつけていた。例えば植木台、糸巻のように、中国では見たことも聞いたこともないものを、どうして児童が知ることができようか、と付記している。

文章の部門を除いて、甲、乙等入賞作品の一部は、一九一四年のパナマ博覧会に出品された。

なお、展覧会終了後、教育部と各省都督、民政長の間で交わされた文書を集めた「文牘」、展覧会蒐集条例、展覧会幹事会簡章、展覧会閲覧規則、審査規則から成る「章程」、各部門の審査報告及びパナマ展覧会出品審査報告を集めた「報告」、毎日の入館者数、各地出品数目表、江蘇省各県児童芸術品統計表、出品各項関係比較表から成る「附表」、児童観念界之研究及び児童之絵画二篇の論文から成る「附録」に、会場略図、会場風景の写真十一葉を加えた『第一次全国児童芸術展覧会紀要』一冊(B5判)が刊行された。

二、第一次全国教育展覧会

上海美術専門学校の教員及び同校を卒業した画家たちは中華教育改進社を中心に全国美術展覧会の開催に向けて運動を進めていった。それが先ず実を結んだのだが、民国十三年(一九二四)七月の第一次全国教育展覧会であつた。その経緯、内容は「美育組報告」⁽⁸⁾によると次の通りである。

第一次全国教育展覧会は、民国十三年七月四日から十日まで、南京の夫子廟旧貢院で行われた。出品者は小学から大学まで、出品作品は数万件、參觀者は数万人に上つた。美術を担当した美育組主任の劉海粟が上海を離れることができなかったため、徐養秋、周玲蓀が代つて準備を行つた。また徐養秋が美育組鑑別主任に、汪亜塵、李祖鴻、周玲蓀、張辰伯、張季信、徐康民が鑑別委員になつた。出品作品は性質のちがひにより、次の二組に分けられた。

- 一、専門組(美術家及び専門学校の出品)
- 一、中等学校組(中学、師範学校の図画成績)

専門組の鑑別基準は、一基本、二構図、三色彩、四表現、五思想で、中等学校組のそれは、一美的創作力を有し、技術優良で教育原理に合うもの、二美的創作力を有し、技術が比較的良く教育原理に合うもの、三美的創作力を有し、技術がややよく教育原理に合うもの、であつた。

図画の鑑別に當つた周玲蓀は次のように述べている。

我国の芸術界はこれまで連絡を欠いていた。今回の全国教育展覧会は特に美育組を設け、全国の芸術家の作品を集め一堂に陳列し、公開展覧するものである。その利益は三つある。第一は一般人をして芸術品を欣賞する機会を得させ、以つて芸術愛好の興趣を引起し、芸術的人生と成すことである。第二は全

国芸術界をして大結合せしめ、相互に連絡させることである。第三は多数の芸術を一ヶ所に集めることにより、相互に参考となし、各々に切磋琢磨することができる。この三つの利益がある。およそ我が中華芸術界の同志はこの企画に対して宜しく奮勉連合すべきである。但し今回の西画部の出品には僅か四、五団体が加入したのみである。遺憾である。あるいは今回の展覧会が始めてのことであるため、多くの作家が気付かなかったのかも知れない。私は展覧会主任徐養秋先生の委任を承けて芸術組籌備委員及び鑑別委員の職についていた。籌備の事は容易であるが、鑑別の職は極めて困難な任務である。純粹芸術作品はおおむね作者自身の感情を表現している。精神を重んじて、形式を重んじない。内容に在って、外表に出していないから、もし芸術品の表画条件についてのみ評論するならば、実に粗浅極まる。正直に言えば、純粹芸術品はただ作者個人がよく妙諦を領悟し得るもので、決して他人が代って鑑別すべきものではない。私はもとよりこの鑑別報告をすることを願うものではないが、職責上、今回の出品作品について次に略述する。籠統粗浅の諷りを免れないことは知っている。糾正して頂ければ幸いである。

このとき、上海美術専門学校学生の出品は約百余件、教職員には劉海粟の油画「秦淮日麗」及び「山色河光」、李毅士「周女士肖像」、李超士の粉画「仕女」両幅、汪亜麗「女子像」、王濟遠水彩「秦淮河」及び「鍾鼓楼」、彭沛民「人体速写」などがあつた。南京美專学生の出品は約百余件、教職員の出品には許敦谷の大幅油画「幼児読書」、王道源「午後之鄉村」、関良の油画「静物」、謝公展「菊花」八幅、蕭俊賢「山水画」などがあつた。また湖南嶽雲学校は木炭の石膏模型写生四幅を出品した。

張季信は手工成績の鑑別を担当した。徐康民は芸術部の鑑別を担当した。師範組では鉛筆画、水彩画、用器画、図案画、木炭写生画、油絵、国粹画、洋画などが出品された。特にすぐれたのは卞煥章の水彩「柳陰朝陽」、孫賜祥「静物」、朱雅墅「蔭」(以上江蘇三師)、左輯之「古寺」、劉啓晋「城郭」、

陳加渲の油絵「静物」(以上江蘇六師)、汪元鏄の油絵「盤龍松」(江蘇八師)、朱鍾英の国粹画「大好秋光」、王庚華の粉画「風景」(以上勤業女師範)、黄金炫の水彩「人物」(安徽一師)、丁文如「墨蘭」(武進県立女師)であつた。中学教育組では洋画水彩が多かつた。中では成從吾の水絵「静物」、姚潤生「蟹」(以上江蘇三中)、宋士芹の水彩「市声」、聞韶之の水絵「陰」(以上江蘇七中)、張宗斌の粉画(江蘇九中)、傅金鎧「風景」、熊同和「静物」、楊札恭「野外写生」(安徽四中)、王作愷、趙俊学、奚邦瑞の風景(以上安徽十中)などの評が高かつた。

呂鳳子によると、国画部は俄に作品を徵集したもので、遠方から集めることはできなかつたという。その出品者及び作品名を「資料1」に掲げた。

三、教育部第一次全国美術展覧会

民国十四年(一九二五)八月十七日から二十三日まで、中華教育改進社は山西省太原の山西大学で第四次年会を開催した。會議には全国十五省区及び蒙古、チベットの会員五百五十四人が参加し、八十六の案件を議決した。會議は分会に分れて行われ、美育組分会(主席劉海粟、李栄培、書記王濟遠)は次の四件の議案を通過させた。⁽⁹⁾

- 一、全国美術展覧会開催案(劉海粟提案)
- 二、国民美術館開設案(劉海粟提案)
- 三、中華古美術品調査委員会組織案(李栄培提案)
- 四、山西省政府に大同雲岡石仏寺保護を求める案(張華、張悌、任恒徳、宗孔提案)

劉海粟の作成した全国美術展覧会開催案原案は大凡次の通りである。
理由

各国には国家の美術展覧会があり、団体あるいは個人の美術展覧会がある。先に政府が奨励し、後から国民が奮い起つ。審美教育の宣化は疾きこと風電の如くであるから、どうして徒らに空言を以ってよく今日の効を致すことができようか。翻って我国を見るに、寂然として聞くこと稀である。間々、一、二の団体あるいは私人が作品を並べて展覧会を挙行することがある。しかし、作品が多くない上、その効たるや僅か一隅に限られている。まことに遺憾である。近ごろ国人は漸く芸術の尊貴なることを感じてきたが、しかし接する機会がない。則ち、全国美術展覧会の開催が当面の急務である。進んだ国人は芸術の尊貴なことを知るといへども、その尊貴の所在はなお漠然としている。製作者は自ら策励せず、古いしきたりに閉じこもって進歩を求めようとしない。鑑賞者は認識力弱く、朱を見て碧と成している。これは審美教育上の大障礙である。薬を用いてこの種の病弊を救うには、展覧会に待つことである。則ち全国展覧会の挙行が猶予できない由縁である。

方法

- 一、徵集、陳列、審査ともに委員会を組織して行つ。
- 一、中華教育改進社より政府に経費を給付するよう申請する。
- 一、定期展覧は北京、上海で行い、不定期展覧は各大都市で行う。
- 一、出品範囲は国画、洋画、雕刻の三部とする。
- 一、展覧会出品者には、その作品の等級によって奨をおくる。

全国美術展覧会開催案の通過によって、美育組は全国美術展覧会委員会を組織し、委員に李栄培、金夢疇、熊連城、王濟遠、蔡元培、李祖鴻、汪亜塵、張華、宗孔、張悌、任恒徳、王悦之、滕固、俞寄凡、錢稻孫、王敬章、劉海粟ら十七名を推挙した。

全国美術展覧会委員会は八月二十日午後、山西大学で第一次談話会を催した。劉海粟、滕固ら八人が出席し、劉海粟を主席に推した。談話会は討論の結果、次の三項を決定した。

民国期における全国規模の美術展覧会

- 一、全国美術展覧会組織大綱起草員に劉海粟、滕固、王濟遠、李栄培、熊連城を選任すること。

- 二、美育組は正式の文書で中華教育改進社に状況を報告し、理事部が速やかに経費を調達するよう要請すること。

- 三、全国美術展覧会を明年（民国十五年）武昌で挙行し、機会があれば各省においても順次展覧すること。

しかし、全国美術展覧会は美育組委員会が計画したように速やかには進捗しなかつた。

民国十六年（一九二七）十一月二十七日、大学院（旧称教育部）芸術教育委員会は第一次会を上海馬斯南路で開催し、⁽¹⁰⁾会議には二つの案件が提出された。大学院美術展覧会挙行と国立芸術大学開設とである。

大学院美術展覧会は、李朴園が「国立芸術院沿革」⁽¹¹⁾を執筆する時点では、会場は上海新普育堂、期日は明年（民国十八年）二月十五日開会と予定され、展覧会準備委員会はすでに数百件の作品を受取っていた。国立芸術院によると、その数は三百件で、日本も参加しようとしていた。本来、前途は明るかったが、「不幸にして種々の憐れむべき、また笑うべき理由」によって途中で改組され延引されていたという。

大学院芸術委員会の決議を承けて、翌民国十七年七月十四日、大学院は大学院美術展覧会組織大綱九条及び美展会籌備委員会組織大綱七条、美展会審査委員会組織大綱八条、美展会徵集出品簡章十四条、美展会奨励簡章十条を⁽¹²⁾公布した。

この時の大学院長蔡元培は、かつて中華民国の成立とともに教育部初代総長に就き、学校教育に於いてと同じように、社会教育に於いても美術教育の重要なことを説いて教育部に社会教育司を置き、その第一科に図書館、博物

館、美術館を管掌させた。また中華教育改進社美育組の全国美術展覧会委員会委員でもあった。美術教育の重要性をよく認識し、その普及と発展に大きな役割を果たした人を大学院長にもっていたことが、全国美術展覧会を実現に向けて進める上で大きな力となったのであろう。

民国十八年（一九二九）一月十六日、教育部（民国十七年十月から十二月五日までの間に大学院の名称をもとの教育部に戻した）は教育部全国美術展覧会総務会議を開き、会場を上海国貨展覧会址とし、三月二十日開会と決定した。ついで一月二十五日、教育部は美術作品を徴集して美術展覧会に送付するよう各省区教育庁に宛てて通令した。⁽¹⁴⁾

その後の経過を伝える資料は見当たらないが、三月二十一、二十二日の二日間、福建教育庁は福州で「教育部全国美術展覧会福建出品協会展覧会」を開催し、閉会后、すぐに応募作品の審査選別を行って上海に送った。⁽¹⁵⁾ この福建省の例から考えると、各省区で予展を行い、選別して上海の全国美術展覧会に送ったようである。

教育部全国美術展覧会は予定の三月二十日よりさらに遅れて、民国十八年四月十日、上海市国貨路のもと国貨展覧会場で開幕、四月三十日閉会した。⁽¹⁶⁾ いわゆる教育部第一次全国美術展覧会である。出品者は全国二十余省に及び、総計一千八十人、出品作品四千六十件、入選者五百四十九人、入選作品一千二百件で、他に特約出品者三百四十二人、出品作品約一千三百件があった。その他に参考部で順次入れ替えして陳列したものが数千件、近人遺作が数百件、日本からの出品が百数十件あり、合計すると一万件以上であった。⁽¹⁷⁾ 各種目毎の応募数は残っていないようであるが、陳列は全作品を七部に分けて次のように行われた。

第一部は書画（書及び中国画）で、作家四百五十余人、作品千二百三十一

件を九室に分けて陳列した。中幅、小幅の作品は比較的小さい室に展示し、大幅の作品は礼堂（講堂）二階に陳列した。第二部は金石で七十五件であった。第三部は西画で第十室から第十三室までの四室に三百五十四件を陳列した。胡根天によると、⁽¹⁸⁾ 西画の審査は大変あまく、カレンダーあるいは広告画に描かれたような、西画といえない作品も展示されていたという。第四部は彫刻で五十七件、第五部は建築で三十四件、第六部は工芸美術で二百八十七件、第七部は美術撮影で二百二十七件であった。その他に日本人出品作品が二室に、近人遺作が二室に、古画参考品が一室に陳列され、欧米人の出品作品七十余件は西画部に散在して陳列された。

会場は陳列部、楽芸部、販売部に分けられ、楽芸部は中央大会堂の四千人を収容できる半円台に設けられた。販売部には商務印書館、中華書局、神州国光社、福建漆器店及び古美術商が店を並べた。また編輯部では美術図書、日本の美術書、『美展三日刊』、生々美術会社の出版物、絵はがきなどを販売した。

会期中に、展覧会の説明、批評、作品紹介などを図版を入れて掲載したタブロイド判八ページの『美展三日刊』総十期（第一期は四月十日付、第十期は五月十日付で発行）が全国美術展覧会編輯組から刊行された。展覧会終了後、全十期を合冊し、さらに「増刊」八ページを加えて表紙を付し、『美展彙刊』一冊として上海、新月書店から刊行された。価格は洋銀一元六角であった。また民国十八年秋、古画参考品の一部（書画六十九点、金石十一一点）及び近人遺作の一部（十七件）を収めた「古部」、近人作品書画百九十二件、西画四十六件、外国作品六件、建築十件、工芸美術十二件、撮影二十八件、合計二百九十四件を収めた「今部」の二部から成る『美展特刊』（一帙二冊）が刊行された。「今部」所載の日本人作品は和田英作「人体」、石井柏亭「雀

牌」、満谷国四郎「人体」、和田三造「人体」、寺内万治郎「人体」、梅原龍三郎「人体」の六点であった。

『特刊』には蔡元培と蔣夢麟が序文を寄せている。蔡元培の文章は、当時の美術界の状況を少しく伝えているので、全文を引いておく。

古人は恒に礼楽を言い、今人は恒に科学美術を言う。美術の広義は音楽をも包含するが、その狭義は我国では恒に書画を言い、欧州では恒に建築、雕刻、図画を言う。近十年、我国は欧州美術学校の制に倣って美術の専門学校を設けたが、公立私立を論ぜず、大抵、図画を主とし、兼ねて雕刻を設けるものは少ない。建築はなおのこと無い。欧州に遊学する者もまた図画を習う者を最多とし、雕刻・建築は皆ごく少数である。そのため我らは常に個人或いは団体の展覧会有るも、その内容は恒に書画に限られている。此れは千余年の歴史が演成したところで、短時間によく改変できるものではない。(民国)十七年、大学院は美術教育委員会の要請を納れて全国美術展覧会の開催を決定した。準備未だ終らずして大学院は改組して教育部となった。そこで教育部は継続して之が準備を行い、十八年四月十日開会、二十日にして会は畢つた。開会前には経費の支出、内容の複雑なるを以って、幾んど成立能わざるの慮があつた。幸いに教育部長官及びその指名による専従職員、及び招聘する所の美術家は均しくよく坦白にして奮起の態度を持ち、行うに安祥にして縝密な手段を以ってして遂に此の空前の大会を支障なく進行せしめた。

会中陳列品の範囲は頗る広く、一書画、二金石、三西画、四雕塑、五建築、六工藝美術、七美術攝影で、それに横^まえるに日本帝国美術院、二科会、春陽会、国画会の選品、寓滬(上海)欧米諸美術家の近作を以ってし、之に縦^たくに收藏家が目を分けて陳列した古代美術品、近代名人の遺作があり、以って参照に供した。まさに盡きること有るも一隅に局せずといふべきである。

開会の初めに當って『美展三日刊』を刊行し、各種説明及び批評の文を発表した。陳列品の比較的特別なるものを選んで撮影し印刷した。会が畢つてそれらを彙編し補正して釐^{おさ}め、今古両冊とし、以って会の紀念品とする。十年二十

年以後、我国美術の進歩は、発表する者は必ず此を視て精備とするであろう。筆路藍縷(事を創めること)は語るにどうして容易であろうか。後の人は必ず此の冊を以って中国美術史上価値ある材料とするには疑い無い。余は最初にこの会のことを聞いた一人である。会務の運営と『特刊』の編印に当られた諸君に謹んで限り無い感謝を表する。

『美術特刊・今部』所収の図版に拠つていえば、国画は山水、人物、花鳥ともに、伝統的画風を継承し特定の古人の筆法を指摘し得る作品も少なくないが、中・西画法を折衷した画風が目立っている。その中でも黄少強「窮途自賞」及び「仕女」、王顕詔「湘水」、胡伯翔「画馬」、蔣潤生「人物」、金章「白燕」、楊清磬「郷屋」、張善孖「画虎」、錢化佛「画佛」、趙尚卿「画松」、高奇峰「花鳥」、陶冷月「山水」、趙少昂「画鼠」、高劍父「画柳」などには日本画や西洋画の構図、技法を攝取した跡がかなり顕著にのこっている。

西画は印象派の影響におおわれているが、その中で象徴主義に近付いた李毅士「科学と芸術」が目立っている。司徒奇「芸人の妻」にはマチスの、王遠勃「坐舞」にはゴーギャンの影が濃い。また潘玉良、張弦、魏弱男、何三峯の裸婦が収載されていることは、いずれ稿を改めて述べるが、近代中国における裸体画の歴史の上で重要なことである。なお、和田英作、満谷国四郎、寺内万治郎、梅原龍三郎の出品は裸婦であつた。

四、全国児童絵画展覧会

民国二十五年(一九三六)の全国児童年に當つて、全国児童年実施委員会は児童絵画の研究提唱、児童創造力の啓発並びに芸術教育の改進を目的として全国児童絵画展覧会を開催することとし、同年一月二十日、準備委員会を発足させた。委員会は即日、第一次会議を開き、以後四月十七日までに六回

に渡って常会を開催し、職務分担、作品募集方法、経費、審査方法などを協議、決定した。展覧会は上海市体育場を会場に六月六日に開幕し、同十五日に閉会した。

会期中に参観須知、会場図、出品統計図等、準備経過、会場布置概要、出品審査経過、本会職員録、本会（以下、冠称の本会を省略）辦法大綱、徵集出品細則、徵品要点、評判委員会簡則、出品審査標準、出品評判標準、児童参加絵画表演辦法、出品奨励辦法、徵集獎品辦法、徵集画家作品辦法、徵集芸教論著辦法、経費概算、会務進行程序、全国児童絵画展覧会（以下、展覧会と略称）出品審査辦法、展覧会出品陳列辦法、展覧会出品評判辦法、展覧会児童絵画表演評奨辦法など関係条令を集めそれに『The National Exhibition of Drawings For Children』を附した『全国児童絵画展覧会会場指南』一冊（B6判）及び本会（以下省略）準備機関、職員録、辦法大綱、徵品細則、徵品要点、評判委員会簡則、出品審査標準、出品評判標準、絵画表演辦法、出品奨励辦法、徵集獎品辦法、徵集画家作品辦法、徵集芸教論著辦法、経費概算、会務進行程序、會議紀錄から成る『全国児童絵画展覧会手冊』一冊（B6判）が刊行された。

『会場指南』及び『手冊』によると、展覧会の経過、内容は次の通りであった。

展覧会籌備委員会は関係規則を定めるとその都度、随時公布するとともに、一方教育部を通じて各省市に通達し、二月十日から出品作品の徵集を始め、五月十日に打切った。出品は全国二十余省に渡り、応募作品数は五万件に近かった。遼寧、吉林、熱河、黒龍江の四省の出品が東北青年教育救済処の協助によって送られてきたことはまことに感慨深いものであった、と胡叔異は「準備経過」に述べている。上海工部局華人教育処の協力によって、上

海の外国人設立の学校からも出品があった。展覧会期間中の児童による絵画表演（会場での揮毫）には百六十余人が応募し、遠くは察哈爾からも参加した。

展覧会の目的は、

甲、児童の芸術興趣を啓発し、審美本能を培植し、創作天性を發揮させるため、

乙、児童の芸術傾向を研究し、想像能力を測驗し、児童芸術教育を改進するため、

でその主旨によって、この展覧会は競争の意味を持たせないこと、出品の優劣は児童、教師、家長と榮辱の關係が無いこと、従って作品は児童の創作能力に十分注意して、教師あるいは家長が意見を加えたり改修しないように求められた。

審査は児童心理に拠り、

甲、内容面—創作性の具有

乙、技術面—1 形象、2 色彩、3 構図

を標準とし、作品を毛筆画、蠟筆画、鉛筆画、粉筆画、水彩画、木炭画、図案画、その他、の八組に分けて行われた。

会場を第一部・各省市出品陳列室、第二部・特種出品陳列室、第三部・児童絵画表演室（甲写生画室、乙中国画室、丙図案画室）に分け、陳列は第一級四歳至六歳、第二級七歳至八歳、第三級九歳至十歳、第四級十一歳至十二歳、第五級十三歳至十五歳に分けて行われた。

『会場指南』、『手冊』の外に、『出品目録』及び『特刊』が刊行されたようであるが、その所在を知らない。

五、教育部第二次全国美術展覽會

民国十八年（一九二九）の教育部第一次全国美術展覽會開催に当って大学院（教育部）が頒布した「準備委員会組織大綱」には、「本会の展覽會は、毎年少なくとも一回開催する。その展覽時期及び場所は、第一次は大学院の決定により、第二次以後は本会が直接これを決定する」と定めてあった。⁽¹⁹⁾

その後、民国二十五年冬に至って、教育部は、第一次展以来八年間の中国美術発展の程度を計り、今後の進展の道を示し、また社会民衆の美術に対する認識を喚起するため、第二次全国美術展覽會を挙行することを決定し、専門家数十人を招聘して準備委員となし、準備委員会を組織して展覽品の徵集、審査、陳列、保管及びその他の事項を取り扱わせることとした。⁽²⁰⁾

しかし、西安事件（民国二十五年十二月十二日）によって延引を余儀なくされ、翌民国二十六年（一九三七）一月十日に至って準備委員会が成立した。委員会は積極的に事を運び、三月三十一日に預展を催して各界知名の士数千人を招待した。展覽會は翌四月一日に開幕し、四月二十日閉会の予定であったが、三日間延長して二十三日に閉幕した。入場者は総数二十余万人に上った⁽²¹⁾という。

展覽會の組織、内容は次の通りであった。

〔委員・職員〕

- (1) 名誉会長・国民政府主席林森
- (2) 名誉副会長・行政院院長蔣介石、中央研究院院長蔡元培
- (3) 準備委員会会長・王世杰
- (4) 副会長・教育部次長段錫朋
- (5) 準備委員（主任委員）張道藩、（常務委員）馬衡、褚民誼、楊振声、滕固、顧樹林、黄建中、雷震、陳礼江、（委員）陳念中など五十四人
- (6) 各組主任幹事顧良杰、喻德輝、郭蓮峯、薛銓曾、（総招待）黄龍先
- (7) 審査委員胡小

民国期における全国規模の美術展覽會

石、李积戡、彭漢懷、高劍父、潘天寿、周肇祥、張大千、張善孖、汪采白、黄賓虹、陳子清、彭恭甫、吳湖帆、楊今甫、溥侗、余紹宋、朱家濟、鄭穎蓀、劉海粟、李毅士、林風眠、吳作人、常書鴻、劉開渠、江小鶴、金学成、関頌声、徐敬直、王個篔、喬曾劬、王福厂、方介堪、柳詒徵、朱希祖、蔣復聰、陳之佛、顏文樑、郭葆昌、吳蘊瑞、董作賓、徐申舒、商承祚、趙太侔、郎靜山、馮四知、鍾山隱など四十六人

(8) 陳列委員楊今甫（兼主任委員）、鄭穎蓀、趙太侔、于非厂、王福厂、潘博山、朱幼清

(9) 編輯委員主任委員滕固、委員馬叔平、蔣吟秋、趙太侔、秦宣夫、唐立厂、鄧以蟄、袁守和、梁思成、徐心芹、李健、施狷鵬、王賢、温肇桐、謝海燕、李宝泉、鄭午昌、王遠勃、倪貽德、鄔克昌、劉獅、劉抗、宗白華、滕白也、徐偉士、潘博山、陸丹林、馬公愚、司徒喬、彭沛民、傅抱石、林文錚、李朴園など三十二人。

〔出品〕

出品地域は江蘇、浙江、福建、広西、山東、河南、陝西、察哈爾、安徽、江西、湖北、雲南、山西、河北、広東、湖南、四川、貴州の十八省、南京、上海、北平、青島、天津の五市に渡り、出品者は総数三千余人に上った。その他に故宮博物院、古物陳列所、中央研究院、中央博物館、中央図書館、国立北平図書館、中国工程学会、西北科学考察団、北平研究院の各機関からも収蔵品が出品された。

三月二十五日現在の応募作品及び陳列と決定した作品の数は次の通りであった。

類別	応募件数	陳列件数
今書法	二八五	五五
今国画	一九八一	四八七
古書画	七一九	四二九

西画	六八五	二〇七
雕塑	八七	二四
建築	六一	一六
図書	一三九	一〇二
金石	一二六	六八
美術工芸		
銅器	八八	八一
図案	一四〇	三九
陶器	二五〇	一七五
其他	七五六	一五三
撮影	二二八	七七
総計	五五四五件	一九一三件

しかし、この時点では広東展品六百余件、及び湖南、四川両省の作品がとにも未着であった。展覧会開幕に当って発行された『教育部第二次全国美術展覧会展品目録』（以下『展品目録』と略称）の説明にも、本目録は各地参加展品の中に南京到着が甚だしく遅れているものがあるが、時間の制限のため、省略せざるを得なかったこと、各地参加展品で開会時に未だ到着していないものは第二期（四月十一日—二十日）に展覧し、別に『補充目録』を發行することが記されていた。

出品件数は、先に挙げた数字が公式とされているが、『展品目録』及び『教育部第二次全国美術展覧会補充目録』に見える数字とは少しく異同があるので、その件数を掲げておく。

種別	展品目録	補充目録
第一部 図書 <small>（善本古書或近代精美圖書）</small>	二二一	四
第二部刻印 <small>（含印譜）</small>	四七	六
第三部美術工芸		

1、銅器	九一	一
2、陶瓷	一五四	九
3、玉器	三三	一
4、漆器	三六	一
5、雜品 <small>（竹刻・牙刻・景泰藍・染織）</small>	七〇	一二
6、図案	三八	一二
7、織繡	一一	七
第四部建築図案及模型	一六	一五
第五部雕塑 <small>（各種雕刻及塑造）</small>	二六	三
第六部西画	二一五	三一
第七部現代書画 <small>（四百九十四号以降は第二期に陳列）</small>	五六九	八三
第八部歴史書画	四一八	一〇
第九部撮影	一三〇	六一
合計	二〇八五件	二五四件

総計二千三百三十九件

『展品目録』の説明によると、目録の配列は參觀の順序に従い、目録印刷の時点ですでに陳列を終えているものの番号は陳列の番号に従い、中央研究院の古物目録は別に刊行される、という。

『展品目録』には「標価」の項があつて、書、国画、西画、雕塑、建築、美術工芸、撮影の現代作品の多くのものについて、例えば吳作人「風雲」四百元、潘玉良「春」千五百元というように、參觀者が破損した場合、弁償の目安となる評価額を付している。当時の現代美術作品の価格を知る上に重要な資料であるが、それについてはすでに別稿⁽²³⁾で述べたから、ここでは紹介に留めておく。

〔陳列・公開〕

会場には竣工したばかりの南京国府路の国立美術陳列館（今、江蘇省美術

館」とその西に隣接する音楽院（即、国民大会堂、今、人民大会堂）が当てられた。陳列館の西に入場券売場を置き、音楽院正門を入口、陳列館大門を出口とした。両会場を六つの陳列室に分け、第一、第二、第三室を音楽院二階に置き、第一室に図書、金石、第二室は美術工芸、第三室に殷墟発掘品を含む中央研究院収蔵の古物を陳列した。第四室は美術陳列館一階で西画、雕塑、図案及び建築模型の、第五室は同館二階で現代書画の、第六室は同館三階で歴代書画の陳列にそれぞれ当てられた。撮影は廊下に展示された。

公開について『展品目録』は次のような参観規則を載せている。

- 一、参観時間は毎日午前九時から午後六時まで。但し月曜日は午後二時から午後六時まで。
 - 一、毎水曜日は夜間午後七時から十時まで開館する。
 - 一、参観には参観券を必要とする。参観券は一人一枚、当日限り有効とする。
 - 一、伝染病あるいは精神病の者は入場できない。
 - 一、十歳以下の児童は入場できない。
 - 一、物品、器具を持って入場してはいけない。傘、杖、カメラは必ず一時預けに預けなければならない。
 - 一、入場するときは参観券を係員に示し、（券の）角を切らせなければならない。
 - い。
 - 一、場内では喫煙、飲食を禁ず。
 - 一、場内では模写、撮影、喧嘩を禁ず。
 - 一、退場後、再び入場するときは、新に参観券を買わなければならない。
 - 一、参観は順序に従い、勝手に歩いてはいけない。
 - 一、参観のとき、展覧物品に手を触れてはいけない。万一、展覧物を破損したときは標価に従って賠償しなければならない。
 - 一、参観者は退場のとき、参観券を係員に渡さなければならない。
- なお、入場料は一人二角、学生、軍隊あるいは団体は一人一角、毎週金曜

民国期における全国規模の美術展覧会

は一人五角とした。それは、観衆を少なくして、美術研究者に研究の機会を提供するためであった。⁽²⁴⁾

〔経費〕

展覧会経費として政府は一万元を交付したが、支出が大幅に予算を超過したため、主催者は入場料及び目録の販売で赤字を補填しようとした。入場料は小額であったが、目録の収益が大きく参観者には極めて不評であったと伝えられる。なお目録の価格は、『陳列品目録』が二角五分、『展品目録』三角五分、『安陽出土古物目録』は十六頁で五分であった。また広東省政府は本展参加のために九千元を支出した。⁽²⁵⁾

会期中、余紹宋、鄧以蟄、徐中舒による講演が行われたが、日時、題目は伝わらない。

展覧会終了後、第二次全国美術展覧会管理委員会編集による『教育部第二次全国美術展覧会専集第一種晋唐五代宋元明清名家書画集』、『第二種現代書画集』、『第三種現代西画図案雕刻集』三冊が商務印書館から発行された。

『第二種現代書画集』によると、国画には伝統的な画法と構図を守った作品も少なくないが、方人定「葡萄」、方塵行「暝色」、朱成淦「甬陽遠望」、李耀民「江邨暮雪」、李毅士「小紅低唱我吹簫」、何炳光「馬頭生雲傍」、阮思琴「風雨滿秋林」、吳公虎「玉潔冰青」、周一峯「寒鴉」、金右昌「山水」、高劍父「碧柳烟沈」、黎雄才「深山聞夜猿」などのように西洋画、あるいは日本画の影響の跡をはっきりと留めている作品、いわゆる新国画が嶺南派を中心に、第一次展より著しく増加していることが注目される。王青芳が六匹の鯉を描いた、いわゆる遊魚図に「莫忘團結爭食鬪」と題していることは当時の社会情勢を反映したもので、国画にそのような傾向が現われたことを示す早い例であろう。

西画では従来の油画、水彩画、粉筆画、木炭画、漆画に新に版画が加えられた。油画はヨーロッパの画家を多いた作品が多いが、王悦之「葉民凶」、石泊夫「流浪者」、孫青羊「暮年窮途」、趙春翔「乞食」など、社会の底辺の人々を主題にした作品が現われたことが注目される。

なお『専集』に載せる王世杰の序文は第二次展の経緯についてもふれているので次に引いておく。

一 国家一民族の文化は、その科学工芸より測れば、僅かによくその一面を見るだけである。美術作品より測れば、往々その全貌をうかがうことができる。蓋し美術の表現するところは、只聰明才智だけでなく、凡そ個人の性情嗜好、社会の風俗信仰すべてを、ともに美術作品によりその微をうかがうことができる。故に一国家一民族文化の特性と程度を体察せんと欲するならば、美術展覧はその他の展覧と比べてもっとも重要である。

美術の事は、往日は常に少数の人の事と見られていた。帝政時代に在っては、甚しくは貴族階級の専業と視られていた。之を習う者は少なく、之を欣賞する人もまた限りがあった。思うに普通の思想嗜好となせば、美術を高くあげることとはできず、あるいは美術発展の障礙ともなる。然し之を習う者少なければ、美術の天才あるも、あるいは美術に力を致さずして徒らに棄材となる。之を欣賞する人に限りあれば、凡そ美術工作に力を致す人も、社会の広大な同情と了解を獲、以つてその進修の興趣を増長することができない。故に単に美術進化の條件について言えば、輓近、人士の唱導するところの美術の大衆化は、すでに不刊の論に属する。もし一国家一民族の文化程度について言えば、美的嗜好と美的鑑別能力は、なおごく少数の人に属して大衆に及ばない。則ち美術の進化が一国家一民族の全体の文化水準と関わりないなら、どうして重視するに足りようか。美術展覧会の挙行は、ただ前に述べたところだけでなく、文化の進歩をうかがうことができる。まして一般民衆の美術に対する興趣をかきたてることができるなら、それは直接間接に美術の進歩に益すること、また鮮くない。

民国二十二年四月、世杰は命を奉じて教育部の長を忝くした。その年冬、英国芸術界の人士は倫敦において中国芸術展覧会を開くことを計画し、吾国政府に故宮博物院及びその他機関の古物を選送して展覧することを求めてきた。世杰は当時その事に賛同し協助した。展覧会はやがて倫敦で挙行され、数ヶ月を経て各国人士の盛大な注意を引き起した。西方一般人士の中国文化に対する認識と了解は実に此の会を始点とするという者もいた。此の会が竣ると、教育部は国内で全国美術展覧会を開催することを決定した。国民政府の前の大学院は、曾つて民国十八年に全国美術展覧会を上海で開いた。此の種の展覧を今後一定の期間をおいて挙行することとし、教育部はその計画するところの全国美術展覧会を名付けて第二次全国美術展覧会とした。準備を経て、この美展は、ついに民国二十六年四月一日、首都に新に建てた美術陳列館に於いて開幕した。会期は凡そ二十有三日。中外の来賓及び各界人士の參觀する者は六万人以上に達した。陳列の展覧品を一図書、二刻印、三美術工芸、四建築図案及び模型、五雕塑、六西画、七現代書画、八歴代書画、九撮影の九大類に分け、総数一千九百十三件であった。展覧が終つて、専集を編印して紀念に留めることを決定した。専集は三種に分ち、第一種を晋唐五代宋元明清名家書画集、第二種を現代書画集、第三種を現代西画図案雕刻集とした。編輯のことは薛銓曾君が主となつた。世杰はここに専集を覽て甚だ感慨がある。我国は歴代、美術作品が元來極めて豊富で、公文書に載せるところは数えきれない。ただ、しばしば兵火に遭い、遺存するものはすでに多くない。近年来、我国美術品の海外に流落するものは夥しい数である。国内の私人收藏家はおおむね旧習に泥み、收藏するところを人に見せることを肯じない。そのため国内に現在所存の古美術品は量質いくばくか、未だ正確な統計がない。政府が全国美展を挙行するのは、蓋し進歩を測驗り美術の大衆化を促進しようとする二大目的の外に、合せて古物の調査と保存を謀ろうとしたからである。従つて今回、全国展覧会展品の選択には、つとめて過去の展覧会の出品との重複を避けた。凡そ倫敦中国芸術展覧会及び教育部第一次全国美術展覧会に出品の作品はともに再びは陳列しなかつた。か

くの如くして展覧会の回数がいよいよ多くなれば、吾人見るところの歴代美術品もまたいよいよ多くなる。若干の時を積めば、吾人は国内現存の古美術品に對し、あるいはひとつの比較的正確な統計を得ることが出来る。将来、あるいは更に一步を進めて、他国の法規に倣つて、全国古美術品の法定登記を行い、以つて古物保存の助けとする事も出来る。專集の編集は、(展覧会の内容を)永く伝え、また展覧会參觀をなし得なかつた者にも觀摩欣賞の機会を与えることが出来る。今夏、中日戦争が発生して以来、吾国古今美術品の兵火に毀ぶものは、凡そ幾許なるかを知らない。則ち此の編の成るは、まさにもつとも藝林の熱望するところである。

中華民國二十六年十二月 王世杰謹序

六、教育部第三次全國美術展覽會

民國二十六年(一九三七)六月、教育部は「全國美術展覽會舉行辦法」を頒布して、二年毎に一度開催することを規定し、先に各省において預展を行うこと、必要経費は教育部が各年度の經常予算に組入れ、別に奨励金を計上して優秀作品の購入及び獎金等に当てることとした。⁽²⁶⁾

しかし、辦法を公布した翌七月には日中戦争が発生し、中国は国を挙げて抗戦に向い、美術展覽會を開催する余裕はしばらくは無かつたようである。教育部は民國三十一年(一九四二)十月になつて、民族復興節に副首都重慶において第三次全國美術展覽會を開催することとした。それは一つには美術教育は優美な徳性を養い、情緒を高めるものであるから、抗戦が勝利の局面に入りつつある今、戦闘意識を培養し、創造精神を激発し、社会人士の戦闘意識を励まし、より高めること、二つには五年來の抗戦の鍛錬を経て、美術作品はすでに新な進歩と成就をなしたから、ここでそれらを一堂に展示し、以つて切磋砥礪に役立て、大きな成功を得ることが目的であつた。

民国期における全國規模の美術展覽會

以下、張道藩「教育部第三次全國美術展覽會概述」⁽²⁷⁾によつて經過、内容等を紹介する。

(組織及び委員)

教育部は、「教育部第三次全國美術展覽會準備委員會」を組織し、準備委員に王世杰、陳樹人、馬衡、潘公展、林風眠、陳之佛、汪日章、蔣志澄、吳俊升、章益、顧樹森、劉季洪、徐悲鴻、蔣復聰、黃君璧、呂斯百、劉開渠、秦宣夫、常書鴻、傅斯年、李濟之、陳礼江、袁同礼、梁思成、楊仲子、唐義精、呂鳳子、張大千、傅抱石、趙畸、顧頡剛、胡光燾、沈子善、宗白華、豐子愷、鄭穎蓀、李金髮、王臨乙、李瑞年、葉淺予、趙望雲、孫福熙、梁又銘、李有行、張采芹、羅文漢、彭百川、徐伯璞、蔡叔慎、伍蠡甫、吳作人、許士騏、王子雲、唐一禾、羅寄梅、楊庭宝、鮑鼎、王獻唐、劉鉄華、衛聚賢、岳崙、梁中銘、傅秉常を招聘した。また王世杰、陳樹人、馬衡、潘公展、林風眠、陳之佛、汪日章、蔣志澄、吳俊升、章益、顧樹森、劉季洪、徐悲鴻、蔣復聰、黃君璧、呂斯百、劉開渠、秦宣夫、常書鴻、張道藩ら二十人を常務委員とし、張道藩を主任委員とした。

準備委員會を四組に分け、第一組は文書、編撰、展覧品徵集及び美術講座を、第二組は事務、會計及び警衛等を、第三組は登記、保管、審査奨励及び返却等を、第四組は招待交際、購入交渉、入場券等をそれぞれ管掌することとした。

教育部は、第三次展は全國の美術の精華を集めるものであるから特に重視するよう政府に要請し、國民政府主席林森を名譽會長、行政院院長孔祥熙、考試院院長戴季陶を名譽副會長、教育部陳部長を會長、教育部顧、余兩次長を副會長とした。

(出品及び範圍)

出品は現代作品及び古物の二種類とし、現代作品は、その内容を一書画（書法篆刻、国画、西画、版画等）、二雕塑、三建築設計及び模型、四工芸美術、各種図案設計及び撮影の四種に分けることとした。

古物は準備委員が各方面に要請して出品するものとし、多くの機関に依頼する予定であったが運送及び保管が困難なことから、重慶近辺の機関にだけ要請した。内容は銅器、玉器、漆器、書画で、その中の一部分は最近、長沙で出土したものであった。参加機関は故宮博物院、中央研究院、中央博物院、説文月刊社及び中国营造学社などであった。この外、教育部芸術文物考察団が敦煌での二年間の調査で得たものから特に精品を選んで陳列し「敦煌芸術専室」とした。

〔徴集及び審査〕

作品の徴集は、準備委員会が定め、教育部が批准した「徴集出品辦法」に拠り、教育部は各省市教育庁局、各国立専科學校以上の学校、国立中等学校に通達し、一方、準備委員会は重慶の各新聞に広告を載せた。

出品作品は抗戦に關係する作品を原則とするが、一般題材の芸術作品の發展を援護する見地から一般作品も受付けることとした。出品は一人三件以内とするが、抗戦に關連する作品は二倍まで認め、作品の体積及び面積は、一般作品については一定の制限を設け、抗戦作品はその二倍まで認めた。民国三十一年十一月一日から作品の受付を始め、十二月五日に打切った。到着した作品は總計一千三百七十四件であった。

搬入締切後、教育部は審査委員会を組織し、陳樹人、沈尹默、馬衡ら四十五人を招請し、書法、国画、西画、工芸美術、雕塑、版画、撮影、建築の八組に分けて審査を行った。美術水準を高めるために、審査は投票で行った。今回は会場の關係で、審査の基準は比較的きびしかった。審査は十二月十六

日から十八日まで、三日三夜を費やして行われた。

しかし、今回は準備が急であったことと作品募集期間が十月以来約三ヶ月と甚だ短かったことに加えて、交通困難であったことから、郵送が延滞し、遠辺の各省から受付期限を過ぎて到着するものが続き、二百九十四件に上った。それらの事情によつて十二月三十一日に第二次審査委員会を開き、入選作品を展覽に加えた。応募作品及び入選の数は次の通りである。

種目	応募件数	陳列件数
書法	八〇	三四
国画	六五八	一九三
西画	四〇六	一八〇
雕塑	四六	三三
建築	九二	四一
工芸美術	八九	五三
攝影	一〇一	三二
図案	七六	四一
版画	一〇一	四六
篆刻	一九	一〇
總計	一六六八	六六三

特別出品は次の通りであった。

国立北平故宮博物院	一〇〇件
国立中央研究院歷史語言研究所	五二件
国立中央博物院準備處	一六件
教育部芸術文物考察団	六〇件
説文月刊社	二〇件

中国营造学社

二七件

総計

二七五件

出品件数は総計一千九百四十三件、出品者は九百六十余人であった。その地域は四川、貴州、陝西、甘肅、広西、湖南、湖北、江西、福建、雲南、青海、新疆の十二省と上海、重慶の二市であった。第二次展の出品地域と比べ、戦火にさらされていた華北、東北からは応募がなく、華南から西北に片寄っていて、戦争の影響が大きかったことが分る。

〔展覧〕

第三次展は重慶の中央図書館の上下二階の全室二十室を展示会場にあてて行われた。

十二月二十四日午前が新聞記者及び文化界人士の招待に当てられ、午後に預展を行った。二十五日午前八時から開幕式が行われ、午後一時から一般に開放された。

準備委員会は展覧期間中八回にわたって、毎回午後七時から九時まで二時間の次のような美術講座を催した。

一月三日	鮑鼎	建築の鑑賞	中央図書館
一月四日	董作賓	殷墟甲骨文字	〃
一月五日	秦宣夫	何を西洋画というか	〃
一月六日	傅抱石	中国山水画の進展	三民主義青年団中央団大礼堂
一月七日	陳之佛	芸術と教育	〃
一月八日	劉開渠	雕塑芸術	〃
一月九日	劉鉄華	中国木刻史	〃
一月十日	許士驥	中国人物画衰落の原因	〃

〔入場〕

民国期における全国規模の美術展覧会

会場の制約から、入場者過多による混雑を防ぐため、準備委員会は入場料を徴収し、その収入を文化労軍におくることにした。入場券は普通と団体に分けられ、普通券は一枚五元、団体券は一枚二元五角とした。学校及び職場の団体は別に優待することとし、十人以上の団体は各所属機関の証明を必要とした。

美術学生の研究に役立てるため、別に規定をつくり、各美術学校及び美術科学生は前もって各学校当局が学生名簿を準備委員会に送っておくと、無料となった。また美術教育の効果を増大するため十二月二十五日、二十七日、民国三十二年一月元日、三日、八日の五日間を無料とした。

展覧会は民国三十一年十二月二十五日に始まり、民国三十二年一月十日に終わった。入場者は総数十万余人に達し、入場料収入は献金と合せて十万五千九百七十五元五角五分に上り、すべて文化労軍に贈られた。

〔授賞〕

準備委員会は出品奨励のために重要と認めたもの、学術地位を高めるものを、民国三十一年度学術審議会奨励学術作品辦法の対象に入れ、同会の選定を経て次の八名に奨金を贈った。

一等奨	呂鳳子「四阿羅漢」国画	一万五千元
二等奨	黄君璧「山水」国画	八千元
〃	秦宣夫「母教」西画	〃
〃	吳作人「空襲下の母親」西画	〃
三等奨	劉開渠「女像」雕塑	四千元
〃	王臨乙「大禹」	〃
〃	劉鉄華「同盟国勝利の予兆」版画	〃
〃	章継南「陶瓷釉下黒顔料」工芸	〃

〔展覧目録〕

第三次展に関する資料は、日中戦争の最中ということもあって、もともと極めて少い。展覧品について論及したものは、先に挙げた張道藩の「概述」ぐらいであろう。同文章を掲載する『社会教育季刊』も多くは現存しないようであるから、現代作品の目録を「資料2」に附しておいた。

七、教育部第四次全国美術展覧会

民国三十七年（一九四八）九月十六日付『綜藝』二巻四・五期合刊の「芸人芸事」欄に、教育部は第四次全国美術展覧会を同年十一月十三日、南京で挙行することに決定し、すでに各省教育庁に、広く書画、雕塑、建築設計、工芸美術等の作品を徴集するよう通令した、これは政府主催の大規模な展覧会である、という記事が出た。また『展望』二巻二十一⁽²⁸⁾期にも見仁署名の「四次全国美展を展望する」と題した短い文章が出た。内容は「突然、第四次全国美展のことを聞いた。美術文化の上からは確かに称賛に値する。しかし我々は展覧会についてあまり楽観的になることができない。この十年来、美術家の生活はどうであったか、戦禍が創作意欲をつぶし、また創作の物質的基礎を破壊した。良心的芸術家は民衆の実生活を表現し、現実を反映し、現実を暴露し、少しでも明るい未来を示そうと願っている。しかし、客観的環境はそのようなことを許さない。しかし寄生生活を営む芸術家は花鳥風月を対象として、現実から遊離している。四次全国美展は、新しい時代の人民生活を反映した作品でなければならない。積極的には人民の喜びと楽しさを表現しなければならない。……今日の芸術は、少数の特殊階級のものではなく、民衆のものでなければならない」というものであった。

『綜藝』二巻六期⁽²⁹⁾は、第四次全国美展のために北平、天津の教育局が各機関に出品を依頼し、北平国立芸専校長徐悲鴻が校内に出品参加を求めるよう

通知したことを伝えている。

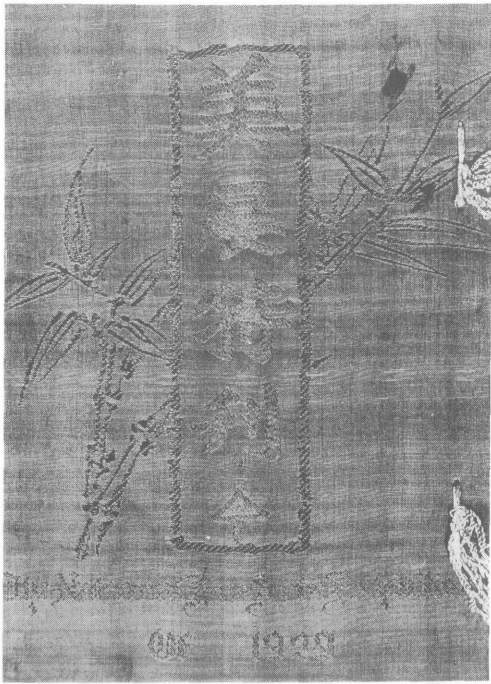
さらに『綜藝』二巻七・八期合刊⁽³⁰⁾は、第四次全国美展が民国三十八年（一九四九）三月二十五日南京で開幕されること、作品の搬入期限が民国三十八年二月十五日であることを伝えた。

しかし、それ以後、第四次全国美展に関する記事は見当らず、実現には到らなかったようである。

（九〇・十・十）

註

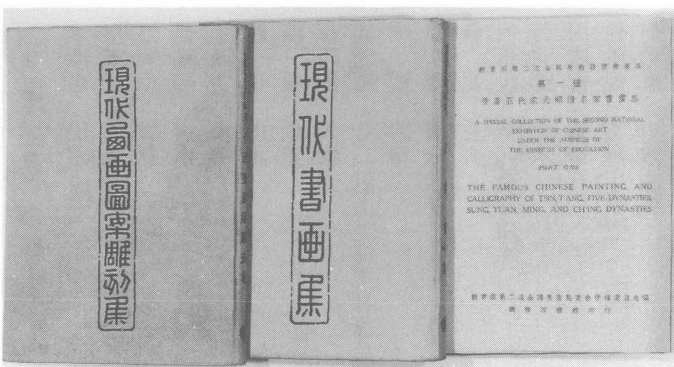
- (1) 菊渥「介紹蘇州美術賽会」（『藝風月刊』三巻一期、民国二十四年）及び『現代美術家顔文樑』学林出版社一九八二年
- (2) 「中国近七十年來教育紀事」商務印書館民国二十四年刊
- (3) 『教育雑誌』四巻八号（民国元年）及び『第一次全国兒童美術展覧会紀要』（教育部社会教育司、民国四年、以下『展覧会紀要』と略称）
- (4) 『展覧会紀要』
- (5) 同前
- (6) 『教育雑誌』六巻三期、民国三年
- (7) 『展覧会紀要』所収の民国三年四月十七日付「教育部函京師警察庁兒童美術品展覧会開會請撥巡警照料文」には「毎日午後一時起四時半止」とある。
- (8) 『新教育』九巻五期、民国十三年
- (9) 『新教育』十一巻二期、民国十四年
- (10) 李朴園「国立芸術院沿革」（『国立芸術院第一屆週年紀念特刊』）
- (11) 同前
- (12) 『中国近七十年來教育紀事』
- (13) 同前
- (14) 同前
- (15) 同前
- (16) 『美展特刊』蔡元培序文による。しかし『美展三日刊』第十期は五月七日付発行で、会期は五月十日までであった可能性がある。
- (17) 李寓一「教育部全国美術展覧会參觀記」（『婦女雑誌』十五巻七号教育部全国美



挿図1 教育部第一次全国美術展覧会
『美展特刊・今部』表紙



挿図2 教育部第一次全国美術展覧会『美展三日刊』第一期



挿図3 教育部第二次全国美術展覧会専集
第一種扉、第二種、第三種表紙

術展覧会特輯号、民国十八年)

- (18) 「看了第一次全国美展西画出品的印象」(『芸観』三期、民国十八年)
- (19) 張沅吉「二届全国美展評述」(『青年芸術』四期、民国二十六年)
- (20) 「第二次全国美術展覧会」(『教育雑誌』二十七卷五号、民国二十六年)
- (21) 註(20)による。後引の王世杰序文には六万人とする。
- (22) 同前及び簡又文「第二次全国美術展覧会・上、下」(『逸経』二十八、二十九期、民国二十六年)
- (23) 拙稿「芸術経済学―書画の値段と扇子のこと―」(和泉市久保惣記念美術館 平成二年特別展示「扇絵―日本・中国・朝鮮―」図録所収)
- (24) 註(20)に同じ
- (25) 簡又文「第二次全国美術展覧会・上」(『逸経』二十八期)
- (26) 陳之佛・徐伯璞「十年來之美術教育」(『教育通訊』復刊四卷二期、民国三十六

年)

〔付記〕

本稿の一部は鹿島美術財団昭和六十一年度及び六十二年「国際交流の援助」による資料収集の成果である。

- (27) 『社会教育季刊』一卷二期、民国三十六年
- (28) 民国三十七年十月九日発行
- (29) 民国三十七年十月一日発行
- (30) 民国三十七年十一月二十日発行

資料1 第一次全國教育展覽會國面部出品目錄

蕭屋泉	大石大幅	凌直枝	菊石	馬瑞圖	枇杷	李彥生	山水
葛冰如女士	山水中幅	凌直枝	墨藤	南美專旭社同人合作	花卉三幅	潘天授	山水
奚屠格女士	青綠山水中幅	凌直枝	墨荷	王野萃	人物	張采芹	畫蘭
蔣屠時女士	淺絳山中幅	凌直枝	梔子	李詠湘	山水(以上南京美專出品)	孫祿卿	山水
蔣屠時女士	淺絳山水小幅	凌直枝	墨竹	符鐵年	四幅(荔枝 枇杷 竹石 黃山松)	張雨江	畫菊
馮白	古松大幅	凌直枝	墨蕉	謝公展	梅花大橫幅	羅正覺	山水
馮白	山茶中幅	直凌枝	墨牡丹	謝公展	菊花(沒花) 四幅	陳鼎	魚壺
姚華	雙鈞蘭花單張未裱(未掛)	王叔惠	繡球牡丹	李清悚	山水	蘇味朔	人物
姚華	竹深留客處山水單張(未掛)	黃學明·馬瑞圖·周楨	紫藤牡丹壽石	呂鳳子	松山大大幅	諸聞韻	竹(以上上海美專出品)
汪吉磨	紅梅單張(未掛)	王叔惠	無量壽佛	樊浩霖	古佛	馮震	紫藤
汪吉磨	墨竹單張(未掛)	周楨	水仙壽石	顧鶴遠	山水	周鼎	畫松
汪吉磨	影印梅花單張(未掛)	周楨	寒林圖	陳伽庵	山水	薛崧	花卉
汪吉磨	墨蘭大幅	馬瑞圖	柳塘詩境	趙守陽	梅花	何景峴	秋江垂釣山水
江采南蘋女士	紫藤軸	馬瑞圖	荷花	李光裕	梅花	蔣明棋	山水
江采南蘋女士	雁來紅芭蕉大幅	王霞宙	水村圖	龔士希	山水	周建言	畫奇石
劉祝三	四尺山水四幅	馬瑞圖	紅梅	翁樹年	山水	何景峴	青綠山水
劉祝三	四尺隔錦屏四幅	聞尊	月季	鄧星鐔	紅梅	何景峴	山水兩幅
錢殷之	墨荷立軸	王霞宙	牡丹	諸聞韻	秋風圖	戎明道	山水(以上一中出品)
錢殷之	松石立軸	馬瑞圖	山水兩幅	吳士綏	水仙牡丹		
符鐵年	山水四幅	聞尊	山水兩幅	賈鎮廷	佛像		
凌直枝	墨梅立軸	王霞宙	士女				

資料2 教育部第三次全國美術展覽會現代作品展出品目錄

一	書法	號數	作者	題名	八	曾永閏	撫張遷牌
一	吳景洲	臨陸游劄子	符節	篆書	九	曾永閏	
二	吳景洲	臨陸游劄子	符節	篆書	一〇	符節	
三	袁殿之	臨洛神賦	符節	行書	一一	符節	
四	袁殿之	書口篋篇	新志	七古詩幅	一二	新志	
五	呂咸	臨漢禮器牌	黃鶴籌	真書正氣歌(一)	一三	黃鶴籌	
六	曾永閏	臨張遷牌	黃鶴籌	真書正氣歌(二)	一四	黃鶴籌	
七	曾永閏	集山谷句	黃鶴籌	真書正氣歌(三)	一五	黃鶴籌	
			黃鶴籌	真書正氣歌(四)	一六	黃鶴籌	
			潘習常	草書陶詩	一七	潘習常	
			枕子善	臨孫過庭書譜	一八	枕子善	
			戴傳賢	國父論革命精神文	一九	戴傳賢	
			張倩英	錄東坡詞	二〇	張倩英	
			劉萍嵐	楷書楚辭	二一	劉萍嵐	
			馬衡	篆書集宋人詞	二二	馬衡	
			董作賓	甲骨文	二三	董作賓	
			陳筑山	心經	二四	陳筑山	
			路金波	古近體詩	二五	路金波	
			雲西	麗江東巴文	二六	雲西	
			馬一浮	行書	二七	馬一浮	
			商承祚	殷周文字	二八	商承祚	
			王獻唐	商錫永書周金文	二九	王獻唐	
			商承祚	釋迦牟尼成道記	三〇	商承祚	
			戴傳賢	正氣歌	三一	戴傳賢	
			曹雨龍	集殷虛文字	三二	曹雨龍	
			董作賓	點絳脣詞	三三	董作賓	
			胡光煒		三四	胡光煒	

三 沈尹默 自書詩册

二 國畫

號數 作者

題名

一	俞蘊乾	秋	嘯傲圖
二	余雪曼	秋	山圖
三	陳倚石	白	衣大士
四	陳樹人	秋	光
五	陳樹人	高	山農村
六	王慶祥	楊	柳燕子
七	蔣風白	八	哥
八	潘天壽	蘭	竹
九	潘天壽	墨	荷
一〇	徐慧	雙	蝶鷄冠
一一	耶拔乎	秋	柳雙鷺
一二	張祖良	芭	蕉竹鷄
一三	王國良	危	崖聳翠
一四	孫青年	牽	馬涉澤圖
一五	王英保	山	水
一六	張我見	山	間除夕
一七	傅思達	灘	江船娘
一八	王克仁	芙	蓉
一九	徐康民	紫	藤
二〇	許公澤	秋	山無盡
二一	鄧白	叢	群雀
二二	莫萬	蘆	雁
二三	陳家祥	洛	城春嬌
二四	朱錦江	長	松山
二五	楊間鶴	梅	花高士圖
二六	楊豫立	松	濤峯影圖
二七	李顯	墨	蟹
二八	佟公超	山	水
二九	佟公超	山	水
三〇	劉克振	松	鼠
三一	劉克振	松	鼠
三二	劉克振	松	鼠
三三	賴光述	墨	筆山水
三四	鄧譚生	山	水
三五	高冠華	秋	霜初起
三六	許正華	桐	花薔薇
三七	蔡光訥	鷓	鴉
三八	孫濟一	秋	山紅葉
三九	何如蘭	山	水
四〇	潘韻	仿	黃鶴山樵山水
四一	趙少昂	心	迹喜雙清
四二	蔡善懷	墨	荷
四三	陳蜀樵	墨	梅
四四	劉敦和	門	草圖
四五	尤玉英	山	水
四六	譚勇	木	工
四七	徐壑	松	溪觀瀑
四八	韓智中	山	水
四九	陳道惠	山	水
五〇	陳道惠	人	物
五一	楊鴻坤	山	水
五二	蔣蓀生	仕	女
五三	楊若英	老	鷹岩
五四	郭世清	寒	豔集禽圖
五五	孟光濤	蜀	山曉霽
五六	陸巽復	山	水
五七	卓啓俊	秋	色
五八	華采眞	棕	欄小鳥
五九	岑學恭	還	我河山
六〇	劉澤	桃	花源
六一	梁白雲	黃	桄樹
六二	吳守仁	觀	鳥圖
六三	陳良	棕	欄白梅
六四	蔣莫棟	人	物
六五	蘇葆楨	和	平勝利
六六	宗其香	慘	痛的回憶
六七	王致仁	山	水
六八	蘇葆楨	粉	香玉暖
六九	俞雲階	竹	鴨
七〇	黃耘石	青	山白雲圖
七一	吳磨若	蘇	長公詩意
七二	蔡叔愼	野	水田疇
七三	蔡叔愼	赫	墨山水
七四	胡叔異	綠	梅
七五	朱懷新	睡	鴨
七六	陳之佛	雁	飛殘月天
七七	陳之佛	雪	裏茶梅
七八	靳尚俠	仕	女
七九	張大千	山	水
八〇	陳玲娟	荷	花翠鳥
八一	胡叔異	梅	
八二	孫宗慰	番	女歌舞圖
八三	孫宗慰	梵	王赴會圖
八四	黎石冰	仕	女
八五	許郭谷	寒	冬
八六	王石岑	幽	壑藏雲
八七	王石岑	紅	樹孤舟
八八	封若無	還	我河山
八九	封若無	盟	機揚威
九〇	王英保	寒	山釀雪
九一	王英保	山	水
九二	周圭	竹	枝
九三	金石昌	觀	潮圖
九四	呂鳳子	四	羅漢
九五	謝仲謀	菊	
九六	胡家岱	凌	霄
九七	童代明	荷	
九八	許公澤	松	壑飛泉
九九	謝孝思	黃	山
一〇〇	韓天眷	避	寇圖
一〇一	劉葦	蟹	菊
一〇二	華以松	百	子圖
一〇三	張文元	送	出征
一〇四	張文元	仇	恨與血債
一〇五	鈕苑君	瀑	流
一〇六	張采芹	喜	鵲
一〇七	芮敬于	松	亭圖
一〇八	馬寶塵	山	水
一〇九	羅文謨	花	卉
一一〇	線雲平	山	水
一一一	周輪園	竹	亭
一一二	張中	山	水
一一三	劉文淵	落	花人獨立
一一四	徐悲鴻	古	柏
一一五	陳曉南	渝	州一景
一一六	李可染	牧	牛圖
一一七	邵恒秋	山	水
一一八	汪嶽雲	山	水
一一九	張毓章	茶	花
一二〇	戴坤維	山	水
一二一	鳳純一	幽	居圖
一二二	蔡佩珠	仕	女
一二三	黎劍虹	枯	樹寒鴉
一二四	馮漢樹	黃	葉村圖
一二五	林清寬	溪	山聳翠圖
一二六	許士騏	松	壑鶴家鄉
一二七	許士騏	右	軍觀鵝圖
一二八	顧樹森	竹	石
一二九	羅鑑中	游	魚
一三〇	吳定一	葡	萄蘋果
一三一	汪亞塵	金	魚
一三二	周竹湘	鷹	與紅葉
一三三	關山月	松	月
一三四	端木夢錫	海	棠

民国期における全国規模の美術展覧会

一三	羅文謨	梅竹水仙	一六	唐鐵	大明山頂	八	艾青	過街橋	四	許九麟	陳君像
一三	線雲平	羅國夫人	一七	龍月廬	山水	九	艾青	午夏	四	許九麟	袁女士像
一三	鄭曼陀	墨竹	一七	鄧季超	山雨欲來	二	孫青羊	凝眸微笑圖	四	錢延康	花
一三	羅文謨	松壑林泉	一七	孫祿卿	松倚絕壁	二	蔣仁	晨	四	費彝復	家庭
一三	楊曼玉	年豐便覺村居好	一七	顧樹森	繁雲空山	三	胡尚谷	新晴	四	費彝復	花匠
一四	傅抱石	石路寒松	一七	聞立榮	邱吉爾玉照	三	鄭善餘	風景	四	楊立光	自畫像
一四	傅抱石	觀鵝	一七	伍瑩	觀音像	四	胡藝斯	風景	四	楊立光	自畫像
一四	徐尊儒	風景	一七	伍瑩	山水	五	劉藝斯	瓦廠	四	曾憲七	芙蓉花
一四	鍾道泉	墨葡萄	一七	伍瑩	山水	五	虞伯衡	靜物	四	宋步雲	渝郊雲海
一四	路金波	勞山山水	一七	伍蠡甫	學清湘八大兩家	六	文金揚	人像	四	吳忠子	秋色
一四	梁又銘	蘇武牧羊	一七	吳公虎	花卉	六	文奇	乞丐	四	宋步雲	中渡口碼頭
一四	吳一峯	宜賓睡佛寺	一八	王惠英	山村曉色	五	林聖揚	自畫像	四	康壽山	人像
一四	姚倩石	芙蓉	一八	岑學恭	春溪鹿鳴	六	陳崇智	灌縣	四	那曉衡	中央大學校門
一四	張霞村	桃花	一八	宗其香	溪山驟雨	二	俞雲階	讀書樂	四	陳志華	芙蓉
一四	蔡佩珠	青綠山水	一八	張仲友	蘆雁	三	朱懷新	靜物	四	楊祖述	芙蓉
一五	□曉山	並蒂圖	一八	唐冠玉	溪聲盡日助詩魂	三	閔希文	肖像	四	楊祖述	芙蓉
一五	林君墨	梅竹	一八	許雲白	山水	四	吳冠中	靜物	四	楊祖述	嘉陵江
一五	王玠	朱籐	一八	莫萬章	河山萬里圖	五	周祖泰	老道人	四	楊祖述	嘉陵江
一五	段懷民	運輪	一八	羅新之	羅漢	六	湯維枝	肖像	四	趙無極	少女
一五	張友鳩	紡紗	一八	劉元	農婦	七	張宗禹	靜物	四	華采真	人像
一五	康師堯	蕉陰仕女	一八	張安治	担草婦	六	趙人磨	靜物	四	楊坤	風景
一五	陳啓楨	看雲	一九	張安治	鑄劍者	六	李劍晨	流浪	四	孩葆昌	風景
一五	鄭碧帆	秋山紅樹	一九	徐傑民	石工	三	劉路得	巴山晴雨	四	黃婉思	作者與其友
一五	黃君璧	浩蕩起靈烟	一九	李向渠	山水	三	余鍾志	渠溪河	四	陳玲娟	靜物
一五	康巽	溇陽琵琶	一九	萬麗金	百蝶圖	三	余鍾志	花	四	殷海雲	靜物
一六	康巽	御溝流紅葉	二〇	程寶棠	魚	四	方幹民	昆明滇池畔	四	周儀先	風景
一六	鄧俊群	松鷹	二〇	程寶棠	題名	四	方幹民	陪都炸後之春	四	吳良鏞	風景
一六	鄧碧帆	不教胡馬渡陰山	二〇	程寶棠	魚	四	方幹民	陪都炸後之春	四	王挺琦	靜物
一六	康師堯	拾菜	二〇	劉力仁	靜物	四	余文治	陪都炸後之春	四	王挺琦	靜物
一六	段懷民	秋山行旅	二〇	劉力仁	靜物	四	余文治	陪都炸後之春	四	王挺琦	靜物
一六	謝來賓	翠鳥	二〇	林風眠	桌	四	倪則蘇	秋收時節	四	王挺琦	靜物
一六	羅崇藝	山水	二〇	夏光	讀	四	倪則蘇	秋收時節	四	王挺琦	靜物
一六	沈樾	羲之觀鵝	二〇	朱豫齋	風景(壁山)	四	趙春翔	渡頭	四	孫宗芳	風景
一六	馬萬里	松竹	二〇	郭琴舫	風景(壁山)	四	費成武	嘉陵江渡口	四	魏正起	風景
			二〇	郭琴舫	風景(壁山)	四	費成武	嘉陵江上	四	魏正起	風景

二九	張倩英	錦繡河山(風景)	二三	常書鴻	陳女士	一九	司徒喬	擲鞭圖	二九	新疆省	消滅敵人
二八	李劍晨	亭園	二四	常書鴻	靜物	一〇	司徒喬	梁副部長寒操	一〇	立迪化	
二七	李宗津	課後	二五	楊蘇	風景	一五	呂斯百	庭院	一〇	師範學校	
二六	李宗津	童子軍	二六	張貽眞	橘子	一五	呂斯百	農夫	一〇	雷圭元	天命玄鳥降而生商
二五	周圭	人像	二七	蘇茂邦	晚霞	一五	王子雲	三危山與鳴沙山	一〇	黃光益	題名
二四	錢蘇娜	靜物	二八	韓巧娟	嘉陵得趣	一五	王子雲	焉支山與祁連山	一〇	張建關	
二三	傅南棟	炸後之金大	二九	陳良	靜物	一五	汪日章	女工	一〇	王炳照	
二二	胡志雅	北碚風光	三〇	艾中信	沙坪小景	一五	汪日章	花	一〇	姚繼勛	
二一	呂霞光	戰時首都之冬	三一	李有行	風景	一五	徐悲鴻	印度牛	一〇	朱培鈞	
二〇	呂霞光	重慶之霧	三二	李有行	風景	一五	丁正獻	連部	一〇	王炳照	
一九	唐一禾	女戰士	三三	郭乾德	風景	一五	蔣仁	軍民齊唱凱旋曲	一〇	姚繼勛	
一八	唐一禾	勝利與和平	三四	張漾兮	孤貧老婦	一五	林聖楊	守衛山河	一〇	張法孟	
一七	蔣蘭圃	從軍	三五	翟翊	苗夷集市	一六	周斯達	受傷不退的英雄	一〇	張法孟	
一六	熊明謙	白沙風景	三六	黃養輝	黔桂鐵路建設之情況	一六	呂斯百	俘虜	一〇	王炳照	
一五	呂聲逸	女孩	三七	黃養輝	黔桂鐵路建設之情況	一六	孫祿賢	俘虜	一〇	王炳照	
一四	陳啓禎	負傷同志	三八	李婉	自畫像	一六	龐薰琴	□布(鎮寧的夷族)	一〇	張法孟	
一三	陳啓禎	某女士像	三九	馮法禎	天目山景	一六	龐薰琴	跳花(安順的青苗)	一〇	周西珍	
一二	張正統	巧□	四〇	張安治	趕場去	一六	龐薰琴	國父像	一〇	王炳照	
一一	劉國樞	漆女士像	四一	董希文	橋	一六	徐德華	桂林七星岩	一〇	王炳照	
一〇	方建平	翟女士像	四二	苗勃然	謝山門小景	一六	談寒光	東西夾擊致敵死命	一〇	黃光益	
〇九	劉次貴	熊女士	四三	謝趣生	吃蘇油茶後	一六	談寒光	切實執行國家總動員	一〇	黃光益	
〇八	劉一層	遊擊隊	四四	夏明	尙主教	一六	談寒光	切實執行國家總動員	一〇	黃光益	
〇七	萬臨喬	趕場	四五	吳作人	空襲下的母親	一六	談寒光	切實執行國家總動員	一〇	黃光益	
〇六	萬臨喬	沙壩上	四六	吳作人	空襲下的母親	一六	談寒光	切實執行國家總動員	一〇	黃光益	
〇五	丁學洙	江津遠霧	四七	雷震	蒙古青年	一六	談寒光	切實執行國家總動員	一〇	黃光益	
〇四	俞啓雄	風景	四八	雷震	蒙古青年	一六	談寒光	切實執行國家總動員	一〇	黃光益	
〇三	李家禎	風景	四九	胡善餘	西康古物	一六	談寒光	切實執行國家總動員	一〇	黃光益	
〇二	李家禎	風景	五〇	胡善餘	西康古物	一六	談寒光	切實執行國家總動員	一〇	黃光益	
〇一	李松時	風景	五一	胡善餘	風景	一六	談寒光	切實執行國家總動員	一〇	黃光益	
〇〇	劉依聞	自畫	五二	黃顯之	戰時小工業區	一六	談寒光	切實執行國家總動員	一〇	黃光益	
九九	劉依聞	酒後	五三	黃顯之	四川鄉野	一六	談寒光	切實執行國家總動員	一〇	黃光益	
九八	李瑞年	靜物(魚)	五四	楊化光	幾生	一六	談寒光	切實執行國家總動員	一〇	黃光益	
九七	李瑞年	靜物(洋蔥)	五五	楊化光	咖啡壺等物	一六	談寒光	切實執行國家總動員	一〇	黃光益	
九六	張之東	風景	五六	秦宜夫	母教	一六	談寒光	切實執行國家總動員	一〇	黃光益	
九五	吳章采	肖像	五七	秦宜夫	漁家	一六	談寒光	切實執行國家總動員	一〇	黃光益	
九四	齋人	灘	五八	朱瑞序	大地回春	一六	談寒光	切實執行國家總動員	一〇	黃光益	

五 建築

號數 作者 題名

一 鄭孝燮 國民大會堂

二 鄭孝燮 國民大會堂

三 鄭孝燮 青年會

四 徐敦文 電影院茶廳及拍賣所聯合設計

五 徐敦文 電影院茶廳及拍賣所聯合設計

六 張雲堯 海濱飯店

七 胡允敬 同盟國勝利紀念坊

八 戴念慈 國民大會堂

九 戴念慈 國民大會堂

一〇 盛怡源 小電影院

一一 王申祐 百貨公司

一二 孫恩華 書房內部設計

一三 向斌南 小圖書館

一四 巫敬桓 壁龕

一五 楊世傑 同盟國勝利紀念坊

一六 戴念慈 公路車站

一七 戴念慈 教堂

一八 周儀先 公路車站及旅舍(一)

一九 周儀先 公路車站及旅舍(二)

二〇 葉仲璣 某城市醫院(一)

二一 葉仲璣 某城市醫院(二)

二二 張雲堯 公路車站

二三 盧繩 戲院門廳

二四 潘錫之 同盟國紀念坊

二五 周輔成 小電影院(一)

二六 周輔成 小電影院(二)

二七 殷海雲 小電影院(一)

二八 殷海雲 小電影院(二)

二九 黃耀羣 壁龕

三〇 張昌齡 公園之入口

三一 吳華慶 正義的呼聲

三二 吳華慶 民主之光

三三 戴志昂 交通技術人員訓練所

三四 戴志昂 九龍坡新所房屋設計

三五 陸謙受 交通技術人員訓練所

三六 陸謙受 禮堂及辦公室透視圖

三七 陸謙受 交通技術人員訓練所

三八 陸謙受 禮堂平面圖及縱剖面圖

三九 馮良檀 小住宅

四〇 馮良檀 週末別墅

四一 馮良檀 週末別墅

四二 茅於泰 週末別墅

四三 茅於泰 蘭州西北招待所

四四 于典章 蘭州西北招待所

四五 于典章 蘭州西北招待所

四六 楊崇永 音樂家住宅

六 工藝

號數 作者 題名

一 章繼南 鳳扇壺

二 章繼南 釉下彩色花鳥茶壺

三 章繼南 釉上影梅茶壺

四 章繼南 三格下釉彩菓盆

五 章繼南 五老峯瓷版

六 蘇子幹 釉下彩虎草瓷版

七 章繼南 純白學生瓷像

八 章繼南 純白瓷馬

九 葉宇 S B式輕轟炸機及噴火機

一〇 錢廷康 總裁像

一一 劉文杰 虎首圖樣椅墊

一二 劉文杰 立方連積各樣

一三 楊守玉 女體

一四 任階間 木排

一五 陳雅范 短瀑

一六 劉明楨 哭

一七 陳顯貞 孩子·貓

一八 彭時蘭 哭

一九 王朝元 仿魏曹望熹造像

二〇 俞啓雄 仿魏曹望熹造像

二一 吳章采 孔雀

二二 康師堯 仕女竹簾畫

二三 黃守堡 包裹布

二四 沈福文 瓶

二五 沈福文 漆板

二六 劉健斌 漆板

二七 鄒永芳 漆盒

二八 鄒永芳 漆盒

二九 張毅 漆方盤

三〇 張毅 漆盤

三一 鄒景璧 又

三二 鄒慧 又

三三 鄒永芳 又

三四 曾永康 又

三五 劉健斌 又

三六 陳志英 又

三七 張庭榮 又

三八 王永治 又

七 攝影

號數 作者 題名

一 襲震宇 歸帆

二 襲仲威 塔

三 童震 氣冲雲霄

四 童震 孤帆

五 余建中 火的洗禮

六 郭琴舫 拂曉追擊

七 郭琴舫 皇軍送來的禮物

八 郭琴舫 活躍的中國青年

九 郭琴舫 擁護領袖

一〇 郭琴舫 鐵流

一一 郭琴舫 電光閃閃

一二 郭琴舫 朝霧

一三 郭琴舫 都江堰

一四 郭琴舫 負重致遠

一五 郭琴舫 天府之國

一六 郭琴舫 突破

一七 郭琴舫 鐵騎

二八 湯範九 又

二九 陳驚萍 又

三〇 譚訓鶴 印染

三一 譚訓鶴 印染

三二 沈福文 瓶

三三 鄒景璧 漆盤

三四 劉慧 又

三五 鄒永芳 又

三六 曾永康 又

三七 劉健斌 又

三八 陳志英 又

三九 曾聖芳 印染

四〇 曾聖芳 印染

一	吳慶華	懷古
二	馮四知	雙峯插雲
三	詹新吾	金頂浮雲
四	詹新吾	蛾帽烟雨
五	倪賢	光與影
六	倪賢	清泉石上流
七	沈誥	蘊藏的力量
八	沈誥	幽靜的畫面爲力的源
九	張登九	鵝頭
十	郎靜山	棹影波光
十一	郎靜山	峨嵋春色
十二	郎靜山	春江
十三	張啓明	漁舟雙歸
十四	張啓明	喬松
十五	張啓明	蛛懸

八 圖案

一	周紹森	榮譽歸來
二	周紹森	靠墊設計
三	烏密風	南洋土人
四	烏密風	漆具設計
五	朱子慕	裝飾
六	宋玉素	漆器設計
七	楊德煒	南海風光
八	夏亞孳	風景
九	梁培裕	構圖
十	嚴協中	日暮
十一	嚴協中	衛
十二	柳冰如	航空郵票
十三	王道平	秋
十四	王道平	勝利的進軍
十五	于繩武	山在虛無縹緲間
十六	袁邁	嘉陵一角

一	袁邁	無題
二	冉彬容	中國之新國防
三	韓辛	出征歸來
四	烏密峰	舞
五	費成武	慶勝利賀新年
六	陳玲娟	花瓶
七	黃守堡	廣告設計
八	葛興萼	絲織品設計
九	楊令德	地毯設計
十	冉彬容	靠墊設計
十一	姚明華	靠墊設計
十二	鄧曙光	最後勝利
十三	嚴協中	火柴封面設計
十四	李慕路	侵略者的沒落
十五	康師堯	天女散花
十六	王如松	圖案招貼廣告
十七	夏明	木刻像形文字
十八	夏明	木刻像形文字
十九	李一夫	凱旋
二十	陳家墀	神聖勞働
二十一	朱楓	冷與熱
二十二	何山	楚漆區
二十三	朱孟匡	到空中去
二十四	李慕路	加強民衆陣線
二十五	周斯達	抗戰畫圖案

九 版畫

一	劉鐵華	題名
二	劉鐵華	看準敵人消滅牠
三	劉鐵華	同盟國勝利的預兆
四	韓尙義	擴大生產堅持抗戰
五	梅健鷹	耕耘
六	梅健鷹	開天闢地
七	李典	可愛
八	李典	大後方的動脈

一	謝梓文	村婦汲水圖
二	王琦	馬車站
三	力群	削蘿蔔
四	力群	幫助抗屬鋤草
五	黃榮燦	送別
六	王琦	吾之防空洞
七	劉崙	秋收
八	陸田	牧
九	野夫	搶運食鹽
十	陸田	巷戰
十一	荒烟	問茶水站
十二	朱鳴岡	公務員之家
十三	李樺	運輸隊
十四	李樺	重逢
十五	李樺	捷報
十六	王樹藝	酒店之夜
十七	王琦	王家莊
十八	梁展	搶修
十九	潘仁	灘江之晨
二十	古元	檢柴女
二十一	古元	出糧
二十二	古元	旅途
二十三	荒煙	秋郊飲馬
二十四	萬堤思	去糧食公賣處道上
二十五	王琦	嘉陵江上
二十六	荒烟	同志再見在前線
二十七	尙莫宗	天府之區
二十八	西崖	祖母與孩兒
二十九	黃榮燦	茶粥店
三十	訥維	忠王碑
三十一	陸田	歡送傷愈將士上前線
三十二	古元	農村小景

十 篆刻

一	都冰如	印章及漢軛拓本
二	梁白雲	梁白雲篆刻
三	楊宗安	響刻留痕
四	王王孫	正氣歌刻石
五	童雪鴻	童雪鴻篆刻
六	童雪鴻	童雪鴻篆刻
七	沈渚菴	沈渚菴篆刻
八	馬萬里	馬萬里篆刻
九	童大年	童心龔篆刻
十	葉銘	西冷印痕
十一	蘇潤寬	

〔付記〕

資料2は電子複写から起した。原本は粗末な宣紙様の紙に印刷されていて、電子複写では判読し難い箇所が生じたので□で示した。また、原文には明らかな誤字、脱字があるが、敢えて原文のままとした。

民国期における全国規模の美術展覧会